

「クリティカ」と人文主義の 伝統

坂部 恵

「クリティカ」と人文主義の伝統

- 前回、カントの「人間学」の構想にたいするフーコーの批判を見た
- 厳密な「学」を参照基準とするカントにたいし、『言葉と物』のフーコーは、マラルメら象徴主義の、生きて現実とあい渉る(詩の人間的な)「ことば」を指標として批判を展開した
- 「人間」と「ことば」の関わり合い、絡み合いは、つねに人文科学の中核に位置する問題である
- 真理そのもの(善そのもの)への接近を学の課題とするプラトンにたいし、「個」を重んじ「真らしさ」(verisimilitudo)をも重視したアリストテレスの系譜

ヴィーコとヘルダー 詩・神話・科学

- Giambattista Vico 1668~1744
- Johann Gottfried Herder(1744~1803)
- ヴィーコは、デカルトとデカルト主義にたいする早い時代の批判者として知られる
- 近代科学・(科学的)合理主義VS人文主義
- 前者が支配的である間は、ヴィーコ(ヘルダーも)マイナーの地位に甘んじていた
- 彼らがにわかに注目されるようになるのは、1970年代以降(科学と西欧合理主義の相対化の時代)
- ヴィーコとおなじくヘルダーも詩的想像力を重視

「新しいクリティカ」の批判

- 「あらゆる真らしいものをも、虚偽と同様に、知性から追放することを命ずるクリティカ」(26)
- 「新しいクリティカ」とは、デカルト主義者アントワーヌ・アルノー(ポール・ロワイヤルの論客)のそれ
- 「共通感覚(sensus communis)は真らしいものから生まれる」(26)
- 「共通感覚はあらゆる賢慮(prudentia)の基準であるように」(27)
- 「想像力、記憶力、あるいは両者が関係する諸技芸、たとえば絵画術、詩作術、弁論術、法学のようなものへの才能(ingenium)は何ら虚弱にされるべきではない」(28)

トピカとインヴェンチオ

- 「ちょうど論点 (argumentum) の発見が、本性からして、その真理性の判断に先立つように、トピカは教授において、クリティカに先立たねばならない」(29)
- 伝統的レトリック(弁論術、修辞学)の5部門
- 1. inventio(発見) 2. dispositio(配置) 3. elocutio(修辞) 4. memoria(記憶) 5. actio、pronunciatio(演説)
- キケロ以来、人文主義者はインヴェンチオを重視
- 「クリティカ」は、もと伝統的レトリックの第二部門(ディスポジチオ)の一部であったものを、ペトルス・ラムスら近世の人文主義者が育成したもの

カントvsヘルダー

- カントの「批判哲学」(*Kritik der reinen Vernunft* etc.)もまた、クリティカの線につらなるものだった
- しかし、アルノーとおなじく、厳密な学としての近代科学を真理認識の範型と見立てたため、人文主義の伝統からは離れている
- とはいえ、方法論論議や『判断力批判』で、「発見的」(Heuristisch>heuresis=inventio)原理を重んずるあたりレトリックの伝統とのつながりを見て取れる
- もと弟子のヘルダーは、詩や文学への関心から、『言語起源論』にむかい、また歴史哲学(の学問性)をめぐってカントと論争する

ラチオvsヴェルブム

- ギリシャ語のロゴスは、もともと、「ことば」、「理性」、「理法」などの意味をあわせもつ
- ラテン語世界への受容にあたって、それは、ratioとverbumという二つのことばに別れて受け継がれた
- 前者は近世のrationalismusにきわまり、後者は「神の創造的息吹、言」という中近東(キリスト教的)バイアスを含みながら、人文主義者から「ヴェルブの錬金術」(ランボー)まで
- Inventioの伝統は、カントの同時代者レッシングの絵画における発見術(『ラオコーン』)から岡倉天心の「新案」(美校の授業科目)まで